居眠りアーヌルダ

高く聳える菩提樹の下では、お釈迦さまのお説法がはじまろうとしていました。おおぜいのお弟子たちは、お釈迦さまを中心にして取り巻くように座っています。空は青く、白い雲もお説法を聞くように、ゆったり流れています。涼しい風がサーッと吹き、人びとは生き返ったように元気になりました。

その頃、アーヌルダは托鉢に歩いていました。托鉢には朝まだ暗いうちに起きて出かけます。村中の家々を回って帰ってくる頃には、お日さまは高く輝き、道は白く乾いて、土ぼこりがもうもうと立っています。暑い暑いインドのことです。歩いているうちに、のどがカラカラに乾いてしまいました。水を飲みたいと思いましたが、そんな暇はありません。もうすぐお釈迦さまのお説法がはじまるからです。遅れたら大変です。急げ急げ。白く乾いた道を飛ぶように走りました。

菩提樹 ピッパラ樹。釈尊がこの木の下で坐禅し、遂に悟り(菩提)を開かれた由来にちなんで、このように名づけられた。桑科に属する喬木。

托鉢 僧が、鉢を持ち、家々に物を乞うて回ること。

やっと間に合ったアーヌルダは、先に来て座っている人たちの邪魔にならないように、そっと輪の中に座ってお説法に聞き入りました。お説法は、*転法輪といいます。お釈迦さまのお声は本当に美しく涼やかで、お言葉は滑らかで玉を転がすようです。

菩提樹の高い梢を吹き抜ける風は、遠い山の万年雪から生まれた、冷たい風でした。暑い道を急いで走って来たアーヌルダは、涼しい風にホッとすると、どうしたことでしょう、急に眠くて眠くてたまらなくなりました。これではいけないと、目をこすったり、膝をつねったり、鼻をつまんだりしてみましたが、どうしてもまぶたがくっついてしまうのです。

無理もありません。小鳥は迦陵頻伽のように美しく可愛い声で囀っていますし、涼しい風はほてった体を冷やしてくれますし、そして何よりも、尊敬するお釈迦さまの優しいお声は聞こえてきますし……。ムニャムニャムニャ、いつかコックリコックリと、いい気持ちで寝込んでしまいました。

どのくらい時間がたったでしょうか。ハッと目覚めたアーヌルダがあたりを見回すと、もうお説法は終って、みんながお釈迦さまに向かって合掌し、静かに席を立って行くところでした。どうしよう、なんということをしてしまったのか。

---

*転法輪　車の輪を回して進むように、法の輪を転じて教えを弘めること。説法と同じ。古代インドでは、輪は戦闘に用いられた武器といわれる。車輪が回転して敵を破砕するように、仏の教えが衆生の迷いを打ち砕くのである。

*迦陵頻伽　妙音鳥などと漢訳する。ヒマラヤ山中にいて美しい声で鳴くといわれる想像上の鳥。

「今日の私の説法は、とりわけ大事な所だ。そのように大事な説法を、居眠りをして聞き損なうのは、*安逸をむさぼる心があるためだ」

と、お釈迦さまはアーヌルダをきつくお叱りになりました。

アーヌルダは恥ずかしさと、自分に対する怒りのため、どうしたらよいか分りませんでした。深くお辞儀をして謝りながら「もう決して眠ることは致しません」と心に誓いました。

それからのアーヌルダは、いよいよ修行に精進し、しかも心に誓ったとおり、眠ることをしませんでした。

そのうちアーヌルダの肉体はだんだん弱り、殊に目は睡眠不足のためにただれてしまいました。お釈迦さまは大変ご心配になり、何度もアーヌルダに無理をしないように、ご忠告になりました。

「修行は、あまり体をいじめると心が乱れ、心が怠けると人間は堕落し、善悪の区別がつかなくなる。*中道が一番尊いのだ。悟りを開くのは、中道でなければいけない」

けれどもアーヌルダは、お釈迦さまのお気持ちを有難いと思いながら、心に誓ったことを破りたくない一心で、やはり眠ることをしませんでした。目はどんどん弱

---

*安逸　労力を惜しんで安易な方法を取ること。仏教では必要以上の眠りは、気力や心力を衰えさせるとして禁じられている。

*中道　両極端を離れ、いずれにも片寄らないこと。対立する二つのものは、離れているからこそ両方を活かすことができる。原始仏教では、苦行と快楽との両極端を排斥するところに中道が成り立つとした。

っていきます。このままでは失明してしまうかも知れません。お釈迦さまは、お医者のジーバカに診察をお頼みになりましたが、アーヌルダがどうしても眠らないものですから、どうしようもありません。

とうとうアーヌルダは失明してしまいました。目が見えなくなってから、雑念が入らないからでしょうか、この世の中に起きるいろいろな出来事、ふしぎなこと、嬉しいこと、困ったこと、悲しいこと、そのようなことがらの因果の理を、アーヌルダは目の見える人よりも、正しくつかむことができるようになりました。肉体の目はつぶれましたが、その反対に心の眼が開いて、かえってものごとの本当のすがたが見えるようになりました。人々は、アーヌルダを尊敬するようになりました。

〝居眠りアーヌルダ〟は〝天眼アーヌルダ〟と呼ばれるようになりました。

それから何年か経ちました。アーヌルダは、相変らず托鉢をし、経典を唱え、修行を怠りませんでした。いつも着ているお袈裟がビリビリに破れてしまいました。誰かが「どうぞ綻びをつくろって下さい」と、新しい小布を供養してくれました。アーヌルダは手さぐりで袈裟をつくろおうとしましたが、目が見えないものですから針に糸を通すことができません。「誰か手を貸してくれないものか」と、ひとりごとを言いながら、何度も何度も針孔に糸を通そうとして、失敗してしまいました。

＊**ジーバカ**　釈尊時代のインドの名医。深く仏教を信じ、釈尊の侍医でもあった。

＊**因果の理**　原因と結果とについての道理。生起させるものを因、生起されたものを果という。原因があれば必ず結果があり、結果があれば必ず原因があるというのが因果の理であり、善い行為には必ず善い報いがあり、悪い行為には悪い報いがあるという道理。

＊**天眼**　普通の人では見えないものまで見ることのできる能力。

＊**袈裟**　染衣・壊色とも漢訳される。僧の衣で、これに大衣、上衣、中着衣の三種があり、これを三衣という。供養されたボロを柿色に染め田の形に縫い合わせるので田相衣ともいわれる。

＊**供養**　尊敬の念で、

その時です。
「どうか、私に功徳を積ませて下さい」
と入って来た人がありました。針に一度で糸が通りました。袈裟の綻びはたちまちつくろえました。
「誰方か存じませんが、有難うございました」
と言って、アーヌルダは今、戸口を出て行った人のうしろ姿を拝みました。
すると、表が急に騒がしくなりました。
「お釈迦さまだ」
「お釈迦さまだ」
「お釈迦さまが、アーヌルダの所へ、何しにいらしたのだろう」
と、人びとは口ぐちに叫び合いました。
「あの尊いお釈迦さまが、わざわざいらして下さった。しかも困っている私を助けて、針に糸を通して下さった」
アーヌルダの見えない目から、涙がボロボロと流れ落ちました。
*世尊と呼ばれ、悟りを開かれたお釈迦さまでさえ、なお功徳を積むという修行に励んでいらっしゃるのです。なんと尊いお方であろうかという感動が、体の中から

品物を差し上げたり、敬礼したりすること。
*功徳　善行を積んで得られる徳。これにより、善行を功徳ということがある。

*世尊　世にも尊い人。仏のこと。釈尊を意味することが多い。

ブルブルと震えるほどの力になって湧き起こり、思わず涙が流れたのです。

アーヌルダの肉体の目は見えなくても、心眼はしっかりと、あの尊く気高いお釈迦さまのおすがたをとらえていました。